

陳舜臣さんを語る会通信

NO.147 Dec. 2025

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2025年12月20日

新版『陳舜臣さんと神戸を歩こう』で追加されたページ(No.146に続く)

16 「国立移民収容所」(現在の「海外移住と文化の交流センター」)

陳舜臣さん、小五の時、神戸港で移民船を見送る/『神戸というまち』と石川達三『蒼氓』

『神戸というまち』『異人館地帯』より

金星台をおりて、約二百メートルほど東へ行くと、黄色い無装飾の『移民館』がある。土地の人は漠然と移民館と称しているが、この建物は、しばしば名称がかわった。戦前は、『国立海外移民収容所』とい

い、戦中は、なんとか鍊成所となり、戦後は移住幹旋所、移住センターなどと呼ばれた。

かつて南米への移民はここに収容され、簡単な海外事情の講義などを受けて、神戸港から移民船で送り出されたのである。

むかし移民船が神戸を出るとき、神戸区(現在の生田区の一部)の小学校六校の学童が、交替で見送りに行った。六年生は受験準備で忙しいので、見送りは五年生の役だった。

昭和十年、神戸小学校の五年生だった筆者も、なんとか神戸の突堤へ移民船を送りに行ったものだ。...

われわれ見送りの学童は、ブラス・バンドの伴奏で、声をかぎりに、壮行歌をうたった。

行け行け同胞海越えて
遠く南米ブラジルへ

御国の光かがやかし

今日の船出ぞ勇ましき

万歳、万歳、万万歳!

歌詞は勇壮だったが、出帆風景は、小



学生の心をさえ、暗くさせるものがあつた。

石川達三の移民小説『蒼氓』に登場するお夏や孫市などのような、みじめな人たちの『落葉の吹きだまり』の葬送といった、うらぶれた気分が、こどもの心にもかんじられたのであろう。

移民館の前を、まっすぐ南におりる道を穴門筋という。その描写が、『蒼氓』の書きだしにある。

(一九三〇年三月八日。)

神戸港は雨である。細々とけぶる春雨である。海は灰色にかすみ、街も朝から夕暮れどきのように暗い。三宮駅から山ノ手に向う赤土の坂道はどろどろのぬかるみである。この道を朝早くから幾台となく自動車がかけて上って行く。それはほとんど絶え間なく後から後からと続く行列である。この道が丘につき当たって行き詰ったところに、黄色い無装飾の大きなビルディングが建ってゐる。...これが「国立海外移民収容所」である。(※文中三宮駅は現在の元町駅)

■右上の画像は竣工間もない「国立移民収容所」(一財)日伯協会のホームページより

以下は『蒼氓』の記述。『神戸というまち』のシーンに連なる箇所を抜粋引用

第三突堤は風である。瓢々と吹く浅春の風である。

樂隊が鳴り始めた。すると突堤にびっしりと並んだ小學生達が、今まで巻いて

ゐた小旗を一齊に開いた。日章旗であつた。それを打ち振り打ち振り樂隊に合はせて歌ひ出した。

行けや同胞海越えて
南の國やブラジルの:

未開の富を拓くべき

これぞ雄々しき開拓者...

歌聲は美しい大きなどよめきとなって鐵の船腹を上って来る。すると移民達は一齊に萬歳を叫び出す。

■以下、「海外移住と文化の交流センター」ホームページより

一九二八 国立移民収容所竣工

一九三二 神戸移住教養所に改称

(四一年閉鎖)

一九五二 神戸移住幹旋所の名称で業務を再開

一九六四 神戸移住センターに改称(七一年閉所)



移民船の神戸出港風景(1937 さんとす丸)
<http://www.asahi.com/gallery/kobeport/>

19 保存された異人館 ハッサム邸とハンター邸



ハンター邸（王子公園内）
神戸市のホームページより



ハッサム邸（相楽園内）
神戸市のホームページより

『神戸わがふるさと』『異人館のこと』
より抜粋引用
(傍線は加筆)

ハッサム邸とハンター邸の保存

ふつうの洋館と異人館のちがいの、一ばん便利
な定義は、異人館はたいてい外人技師の設計にな
るといふことである。だから、大学や高等工業の
建築科卒業生が多くなって、たいがいの建物は日
本人建築家の手で出来るようになった大正初期に
は、すでに異人館時代は終わりを告げたといつて
よい。

したがって、異人館は例外なく古い。そして近
代の生活には適さないのがふつうだ。

このままで行けば、異人館といわれる建物は、
北野町界隈から、一軒のこらず消えてしまうだろ
う。

そこで、代表的な異人館を二軒、保存すること
になった。

北野町二丁目にあったインド商ハッサム邸と、
三丁目にあったハンター（帰化して範多という姓
を名のった）邸を、それぞれ解体して、前者を相
楽園に、後者を王子公園に移して、再建保存して
いる。

ハッサム邸の家主は回教寺院で、ハンター邸の
所有者は中国人の林氏であったが、いずれも無償
で県と市に寄贈し、いまは『重要文化財』となっ
ている。

■懇意の林同福氏（公財孫中山記念会理事）から、
右の文中、傍線部分、「林氏のフルネームを調べ
てほしい」という依頼があった。
以下は、このことについての調査報告です。

『旧ハンター氏邸移築工事報告書』（傍線は加筆）

県立図書館所蔵、『旧ハンター氏邸移築工事報
告書』（昭和39年兵庫県教育委員会刊行）から抜
粋引用、あるいは要約致します。

戦後、ハンター一族が邸を手放し、所有者は、
楊氏、岡本義隆氏とかわり、昭和二十七年からは藤
月荘として吉田千代野氏の経営する料理旅館に転
用された。しかし、昭和三十六年、吉田氏は廃業し、
土地・建物は処分されることとなった。

このハンター氏邸の取りこわしについては中央
でも重大な関心を示し、昭和三十六年九月九日付で、
藤島亥治郎ほか諸博士から、神戸市長原口忠次郎
氏に対して「神戸市内の建築「旧ハンター氏邸」
の保存に関する建議書」が提出された。

同書は、明治期に発達した国際港都「神戸」に
おいて、洋風建築がいかに貴重な意義をもってい
るか、ということと、戦後に残された数少ない遺
構の中において、旧ハンター氏邸がどんなに大切
なものであるかを縷々説明し、さきに、保存が決
まっていた「旧ハッサム氏邸」と同様の扱いを要
望するものであった。

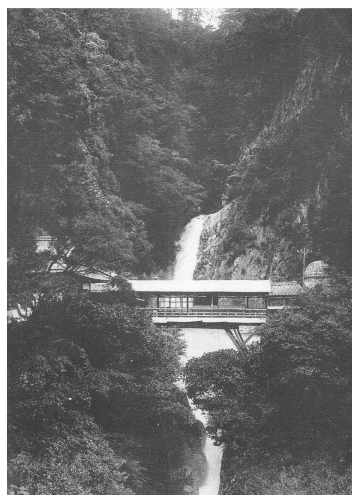
同要望は、財政上の問題もあり、神戸市と兵庫
県、両者主体に実現の方向で話が進み、関係方面
との打合せがおこなわれた。

この次に出てくるのが次の記述である。

昭和三十六年一月四日、林金水・岡本義隆・吉
田千代野・林同春の四氏より提出された「寄贈承
諾書」は、こうした経緯を経たうえのものであり、
附属文書である「建物の解体撤去についての約定
書」にも双方調印して、一月一三日には、知事
の寄贈受諾書が出された。

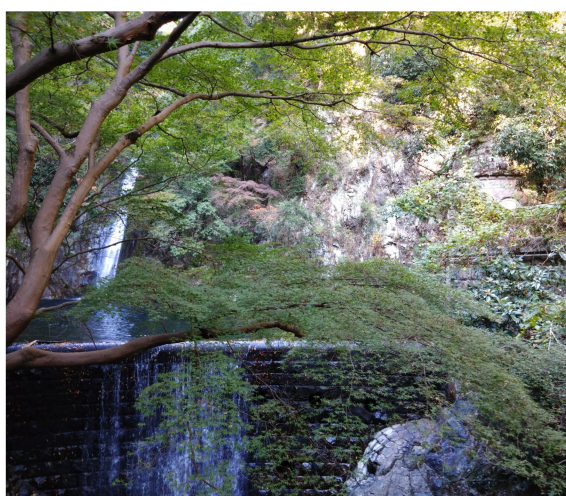
■林氏について記述があるのは右傍線の箇所のみ。

21 布引の滝とモラエス



雌滝の風景

正・昭・神
上は和
戸絵は
昭和は
初期が
に茶店き
が見に
える。より
下は。滝
は現を
在。跨
ぐの



『神戸というまち』『布引と六甲』から抜粋引用します。

明治時代には、布引は神戸のもつ最も有力な観光資源だった。観光客は人力車をつらねて、ここへやってきたものだ。鉄道唱歌にも

山には絶えず布引の 滝見に人ものぼりゆく

とある。

山手の外人住宅地に近いので、布引はむかしから在留外人がよく杖をひいた場所である。

明治三十年ごろ、外人たちは散歩のほかに、別のほほえましい目的をもって、ここまでやってきたようだ。というのは、布引の茶店に、三人の美人の姉妹がいたのである。三人とも色白で、さわだった美貌のもち主だった。一番うえがお松、二番目がお福、三番目の娘の名は、筆者の手もとの資料では不明である。外人たちは彼女たちをスリー・グレース（三美人）ともてはやして、毎朝仕事のまえに茶店までのぼって、彼女たちを相手にたわいのない話をするのを楽しみにしていた。

一番上のお松を射おとしたのは、イギリスの海軍軍人だった。…。二番目の美人お福は、なんとなく哀愁を帯びた娘で、臘のような膚をもっていた。彼女たちをめざしてせっせと通う男たちも多かったが、そのなかに一人、ヒゲをはやした海軍軍人がいた。名を、ベンゼスラオ・デ・モラエスという。この男も、南欧人らしくない翳をもっていた。

モラエス（1854-1929）はポルトガル海軍の士官。のち、神戸ポルトガル総領事。恋多き青年、壮年？で、それまで何度も不首尾に終わっています。神戸では、布引の茶店の美人三姉妹の次女・お福に心惹かれるようになりますが、おもいはかなわなかった。

その後、徳島へ遊びに行ったとき、焼餅屋の手伝いをしていた福本ヨネを見染め、今度はめでたく実を結びます。その後のモラエスの人生について、陳さんの記述はまだまだ続きます。

ところで、陳さんは吉井勇の歌、

モラエスは阿波の辺土に死ぬるまで
日本を恋いぬ かなしきまでに

を引き、また、最後、日本人になろうとしたモラエスについて、次のように言っています。

モラエスのように考えこむ人間はだめだ。「おれは日本人だ」と、ほがらかに思いこむことのできる人になれる。

モラエスは、日本を恋い、日本人になろうと、神戸の祥福寺へ参禅するなどの厳しい努力の甲斐なく、日本人になれなかったそんな人だったようです。

なお、モラエスの墓所は徳島市にあります。

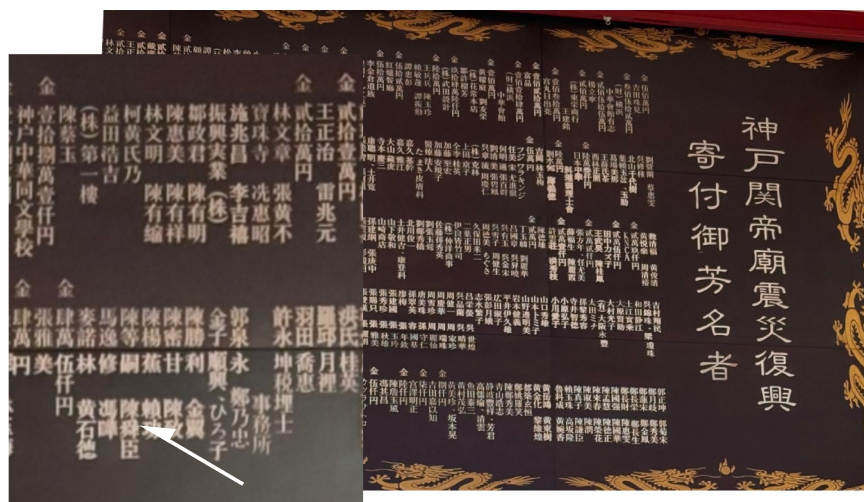


東遊園地の木漏れ日の中にある
「モラエス翁像」

27 陳舜臣さんと神戸関帝廟(下山手通2丁目)

陳舜臣さんも関帝廟の維持に協力

神戸関帝廟の維持管理は一般社団法人中華会館が行っています。ところで、下の普度勝会(ふどしやうえ)の後宴の写真、鴨居の上に大きな額が写っておりますが、これらは、いずれも、右にあげた「神戸関帝廟震災復興寄付御芳名者」のような寄付者芳名の額です。関帝廟の維持はこのような人々の厚志に負っている



陳さんの巻頭エッセイ(下の枠内)が載った関帝廟パンフ(A6版)の表紙

(写真はいずれも前田寿美恵氏提供)



ころが大きいのでしよう。貳拾萬円のところ、陳舜臣さんの名も見えます。白い矢印。

関帝廟のこと 陳 舜臣

関帝廟に祀られている三国志の英雄関羽は蜀の皇帝劉備に仕えた人物で、この世においては「皇帝」でもなんでもなかった。それなのに中国の人たちは、彼を記念する廟を立て、彼を「関帝」とあがめた。

関羽が武運拙く漳水のほとりて敗死したのは、建安二十四年(二一九)の十二月であった。関羽と戦った呉の総帥呂蒙は、その直後に公安という所で病死している。呉の副将孫皎も関羽の死から一カ月たたぬうちに死んだ。関羽の首級が呉の同盟軍の曹操のところに送られたのは翌年の正月であり、曹操が六十五歳で洛陽で病死したのは、おなじ日であった。『三国志演義』では、呂蒙も曹操も関羽の怨霊にとりつかれて死んだことになっている。

こんなことから、関帝廟は鎮魂のための「社」であるとする説が有力だが、では怨霊を鎮めるのは、なぜ関羽かという問題が残る。史上、おびただしい人が恨みをのんで死んでいる。たとえば屈原などはその代表的な人物であろう。

しかし、この世に怨念をもった悲劇的な武将として、最もよく知られたのはなんといっても関羽である。さらに関羽には「誠実」という、まことに人間的な面があった。ついには敵となった曹操にも、恩義をうけたことがあり、立ち去るときに、義理堅く恩返しをしている。この信義に厚いことが、関帝さまが商人に崇拝される一因だという人がいるのだ。契約すれば、どんなことがあってもそれを守る。関羽の義理堅さは、じつは商人だけに必須のものではない。学問であれ、役人であれ、技術者であれ、信義は厳に守るべきなのだ。ただ関羽の故郷の解県は、塩の産地で、全国から塩商が集まる。そんなことで商人と縁が深かったのであろう。

一般には関公と呼ばれたが、宋代に武安王に加封され、そのころから彼を祀るところは、関王廟と呼ばれるようになった。明の万暦は二十二年(一五九四)、協護国忠義大帝に追封された。関帝廟という名はそれ以後である。